

新目録規則RDAの導入について

このえつこ
河野江津子

(メディアセンター本部課長)

2017年4月より、慶應義塾大学の図書館の洋書に適用する目録規則を英米目録規則第2版（Anglo-American Cataloguing Rules 2nd edition, 以下「AACR2」とする）の2002 revisionからResource Description and Access（以下「RDA」とする）に変更した。本稿では、規則の概要、変更の経緯、調査・準備から導入までと適用後の状況について紹介する。

1 目録規則と書誌フォーマット

目録規則とは、対象となる資料の適切な情報源から記述すべき書誌事項（以下「エレメント」とする）を抜き出し、利用者が発見・識別・選択・入手できるよう必要なアクセス・ポイントを付して記述するための規則である。AACR2は、準国際的な目録規則として英語圏をはじめ世界各国で広く利用されているが、もともとはカード形式の目録に必要な情報を収められるよう意識して、エレメント間の区切り記号などの構文まで含めた記述方法を規定している。図1はAACR2に基づいて記述した洋書の書誌例である。

Monet : the early years / George T. M. Shackelford ; with essays by Anthea Callen ... [et al].
Fort Worth : Kimbell Art Museum ; New Haven : distributed by Yale University Press, c2016.
206 p. : ill. (chiefly col.) ; 29 cm.

図1 AACR2による記述例

現在、目録はデータベースに編成され、図書館ではOPACを使って検索する形が主流である。目録を機械可読形にするための書誌フォーマットとして、本学ではMARC21¹⁾を採用している。国内の大学図書館は国立情報学研究所の総合目録データベース、NACSIS-CAT（以下「CAT」とする）に書誌・所蔵を登録するため、CAT形式を採用している館がほとんどだが、本学は1998年10月のKOSMOS IIへのシステム移行時にCATからMARC21へ変更し

た。前システムでCATの求める多階層の書誌構造がシステムに負荷をかけていたこと、CAT以外の外部リソースとのデータ交換がしにくいことなどから、国際的に広く流通し、フラットな書誌構造が実現できるフォーマットに変更する必要があることなどが理由である。

図1の書誌をMARC21で記述すると図2のようになる。3桁の数字はエリアを表すタグ（245ならタイトルと責任表示）、それに続く2桁のコードはタグとの組み合わせで意味が変わるインディケータ、a, bのようなコードはタグの中でエレメントを分けるサブフィールドである。なお、図は本学の現図書館システムKOSMOS IIIの書誌編集画面イメージで、規則上は、サブフィールドは\$a, \$bのように“\$”を付けてコーディングすることになっている。

```
100 1 a Shackelford, George T. M.,  
d 1955-  
245 10 a Monet :  
b the early years /  
c George T. M. Shackelford ; with essays  
by Anthea Callen ... [et al.].  
260 a Fort Worth :  
b Kimbell Art Museum ;  
a New Haven :  
b distributed by Yale University Press,  
c c2016.  
300 a 206 p. :  
b ill. (chiefly col.) ;  
c 29 cm.  
700 a Callen, Anthea.
```

図2 MARC21形式（AACR2準拠）での記述例

AACR2は「I記述」と「II標目、統一タイトルおよび参照」の部からなり、I部は「図書」「地図資料」「映画およびビデオ録画」「静止画像資料」「電子資料」「逐次刊行物」など扱う資料種別ごとに章が分かれている。目録を作成する際、対象がどんな資料かによって該当の章を参照する方式である。しかし、この種別には内容的側面と物理的側面が混在している上に、昨今では刊行物の媒体が多岐に渡り、例えば「電子媒体の地図」や「PCで再生できる録音ディスク」など規則上の括りに当てはめにくいものが発生

するようになった。また、旧来のままのAACR2では電子環境での目録作成の利点を活かすデータが作りにくいということもあり、新しい目録規則が策定された。その結果生まれたのがRDAである。

2 RDAの適用

RDAの主な特徴としては以下が挙げられる。²⁾

- ・書誌レコードの機能要件 (Functional Requirements for Bibliographic Records, 以下「FRBR」とする) という概念モデルを取り入れた規則構造になっている。
- ・FRBRで定義される表現形・個別資料・著作・表現形 (第1グループ), 個人・家族・団体 (第2グループ), 概念・物・出来事・場所 (第3グループ) という各実体の属性記録と, 実体間の様々な関連の記録の規則から成っている。
- ・資料の内容的側面と物理的側面が整理された。
- ・属性・関連のエレメントが増強された。
- ・区切り記号などの構文上の規定は廃し, 意味的側面に特化した。これにより, 特定のフォーマットにとらわれずにエレメントを記述できるようにした。
- ・省略や略号の使用は行わない。

上記のように構成的には大きく変わったが, AACR2からの継続性も考慮されており, 書誌フォーマットも従来通りMARC21形式で作成するのが主流である。MARC21側でもRDAに対応するためにタグの新設などを行っている。

また, 規則上では実体とその関連が詳細に表せるようになったが, 実際に作成されるレコードは, 現状では表現形, 個別資料, 典拠としての個人・家族・団体に止まるケースが多く, 本学もその範囲内での適用である。

図3は図2と同じ図書をRDAに基づいて記述した例の一部である。2017年4月以降, 本学でも洋書はほぼこのような形で作成している。

書誌記述上の顕著な変更点としては, 以下が挙げられる。

- ・245\$c: 責任表示は肩書等も転記。複数人でも省略しないが, RDAでは4人以上の場合は任意で省略可。本学では独自に10人程度を任意省略の目安にしている。
- ・264: 出版事項が制作・出版・頒布・製作事項

| | | | |
|------------|-----------|----------|--|
| <u>100</u> | <u>1</u> | <u>a</u> | Shackelford, George T. M., |
| | | <u>d</u> | 1955- |
| | | <u>e</u> | author. |
| <u>245</u> | <u>10</u> | <u>a</u> | Monet : |
| | | <u>b</u> | the early years / |
| | | <u>c</u> | George T. M. Shackelford ; with essays |
| | | <u>c</u> | by Anthea Callen, Mary Dailey Desmarais, |
| | | <u>c</u> | Richard Shiff, Richard Thomson. |
| <u>264</u> | <u>1</u> | <u>a</u> | Fort Worth : |
| | | <u>b</u> | Kimbell Art Museum, |
| | | <u>c</u> | [2016] |
| <u>264</u> | <u>2</u> | <u>a</u> | New Haven : |
| | | <u>b</u> | distributed by Yale University Press |
| <u>264</u> | <u>4</u> | <u>c</u> | ©2016 |
| <u>300</u> | — | <u>a</u> | 206 pages : |
| | | <u>b</u> | illustrations (chiefly color) ; |
| | | <u>c</u> | 29 cm |
| <u>336</u> | — | <u>a</u> | text |
| | | <u>b</u> | txt |
| | | <u>z</u> | rdacontent |
| <u>336</u> | — | <u>a</u> | still image |
| | | <u>b</u> | sti |
| | | <u>z</u> | rdacontent |
| <u>337</u> | — | <u>a</u> | unmediated |
| | | <u>b</u> | n |
| | | <u>z</u> | rdamedia |
| <u>338</u> | — | <u>a</u> | volume |
| | | <u>b</u> | nc |
| | | <u>z</u> | rdacarrier |
| <u>700</u> | <u>1</u> | <u>a</u> | Callen, Anthea, |
| | | <u>e</u> | writer of essay. |

図3 MARC21形式 (RDA準拠) での記述例

に分かれ, インディケータで区別するようになった。

- ・264_4: 著作権年を明記。
- ・300: 用語の省略形を使用しなくなった。この形態事項のタグで見るとわかりやすい。
- ・336, 337, 338: 表現・機器・キャリア種別で多面的な資料の種別を表す。代わりに, 図書以外の資料で使われていた245\$hの一般資料表示は不要となった。

なお, 1XX, 7XXなど標目タグの\$eの関連指示子は, 典拠リンクの仕組みで不都合があるため, 本学では使用していない。また, 例示は抜粋のため, 700の2件目以降の標目は省略している。

3 慶應での変更の経緯

AACR2に代わる新しい規則RDAがリリースされたのは2010年である。本学でもリリース前後からその内容や動向に注目はしていたが, 導入に向けての具体的なアクションは保留し, 他機関の対応を見守っていた。そんな中, 2013年4月に米国議会図書館 (以下「LC」とする) が典拠データベースをRDAに基づいて一括変換し, 書誌への適用も開始した。西洋人の典拠ソースとしてLC Authoritiesを参照していたため, 本学でも典拠レコードにはRDAを適用

せざるを得なくなった。しかし、書誌レコードは引き続きAACR2に準拠していたため、LC由来の書誌をコピーするとRDA形からAACR2形に修正するという作業を強いられることになった。そのため、本学でも書誌編集の効率化の面からRDAの採用を前向きに検討すべき必然性が出てきたのである。また、同じベンダーの図書館システムを使用している国立国会図書館（以下「NDL」とする）がLCと同時に洋書への適用を開始したので、国内での導入事例として参考にできたという面もある。

RDAへの変更についてメディアセンター内で提案したのは、2013年7月の「全塾図書雑誌担当者会議」の場であった。ここで、世界的な導入状況やAACR2からの変更点などを紹介し、既に典拠には適用開始したこと、いずれ書誌にも適用するという方向性について確認した。

採用希望理由としては以下を挙げて理解を得た。

- ・ LC, OCLCなど世界標準をリードする機関およびNDLをはじめとする各国国立図書館での採用。
- ・ 上記のような主要機関と同じ形式のレコードを持つことで、共通の視点での情報収集・交換が可能。
- ・ RDAを採用する機関やユーティリティからの書誌調達³⁾やデータ交換などにおける省力化。
- ・ 次期図書館システムの候補も海外パッケージ製品が有力で、RDAへの対応も期待できる。
- ・ MARC21に替わるメタデータフォーマットの開発が進んでおり、将来的な移行可能性に備える。
- ・ AACR2での問題点が改善される。例えば、目録担当者だけでなく利用者にもわかりやすい表記にする、一般資料表示が表現・機器・キャリア種別に代わって正確に資料の状態が表せる、など。

なお、以下のようにRDAへの対応としては不完全な面もあった。

- ・ RDAはFRBR概念に基づいた規則だが、本学では実質的には体现形、個別資料、典拠形としての個人・家族・団体のレコードしか作成しておらず、現状では書誌-典拠間や雑誌の前誌・後誌など限られた書誌間リンク以外の新たなデータ連関は生み出せない。
- ・ 関連を表すためには、データの持ち方とともに図書館システムの機能改善が必要だが未対応。また、OPACやディスカバリーサービスなど利

用者にデータを見せる側の環境も作用する。

しかし、第1段階では既にRDAが適用された外部機関の書誌とルールを合わせることに主眼を置いた。

4 調査・準備から導入まで

導入の方向性が固まり、まずは目録担当者のRDAに対する理解を深める必要があった。とりかかりとして、2013年9月に開催されたワークショップ「新しい知識と情報の組織化：RDAの理念と実践」に専任職員2名を派遣した。このワークショップはJoint Steering Committee for the Development of RDAの議長であったBarbara B. Tillett氏を招いて行われたもので、LCの目録担当者向けの研修内容を元にしており、後に資料が一般刊行もされて⁴⁾参考になった。

その後、当初の適用開始目標は、本学図書館システムのV22へのバージョンアップのタイミングに合わせ、2015年9月と具体的に設定した。それに向けて2015年度から準備を本格化させ、

- ・ 外部機関（LC, OCLC, NDL）での適用状況、目録作成ポリシーについての調査
- ・ RDAのためのMARC21の新設タグ、サブフィールド調査
- ・ 適用対象資料の範囲決定
- ・ 本学で必ず記述するコア・エレメントの選定などを進めていった。

しかし、リース期間の関係上、V22のテスト環境サーバーがすぐに用意できなかったこと、移行後でないとV22へのRDA化の影響が確かめられないことなどから延期を余儀なくされた。その後も、白染サテライトライブラリー閉鎖に伴う山中資料センター第2棟の建設と資料移動に付随する大規模な遡及事業やデータ整備に注力したこと、検討に割ける職員の減員があったことなどを要因とし、何度か開始目標を延期することとなった。

2015年までに事前の調査や大まかなローカルポリシーの設定を終えた後、2016年に入ってから具体的な目録作業マニュアルの整備に着手した。既存のHTML版マニュアルの構成をまるごと活かしつつ、RDA用としての別セットを新たに作成する方式を取った。実際に作業の拠り所となるものを用意する段階に至って、目録担当者の打合せも月2、3回と頻繁になり、条文解釈のすり合わせを行ってはタグ

別、ケース別のマニュアルに落とし込んでいった。

AACR2とMARC21については、KOSMOS IIで和書・洋書ともに適用することになった際に、全塾目録WGのメンバーで分担して最新版を翻訳するという作業が行われたことがある。ただし、今回のRDAはあまりに大部なこと、更新頻度が頻繁なことから翻訳はあきらめ、原文のまま参照することにした。しかし、日常の作業中に英語の条文を解説するのは敷居が高いため、疑問点はなるべくマニュアル内で解決できるよう内容を充実させた。

ちなみに、RDAの条文はRDA ToolkitというWebベースのサービスで閲覧できるが、委託スタッフまでアクセスできるように契約を拡大し、運用に備えた。

V22のテスト環境が2017年の1月に設置されたことから、開始時期は最終的に2017年4月からと決定した。1月から3月にかけては最後の準備段階として、本部システム担当や全塾レファレンス担当者会議の協力を得ながら以下のような調整を行った。

- ・RDA対応の書誌テンプレート追加
- ・RDA新設タグからの検索・ブラウズインデックス生成機能追加
- ・ローマ字自動生成の対象タグ追加
- ・定形語入力のエレメントに対応する入力補助候補語リストの整備、追加
- ・レコード保存時のバリデーション、アラート設定の追加
- ・利用者用OPAC、ディスカバリーサービスの検索画面メニューと結果表示されるタグの調整

並行して、目録作業の主力を担う委託スタッフのため、2月に説明会を開催し、3月にかけてトレーニングを実施した。テスト環境で実際にレコードを作成してもらい、この段階で頻発するミスを把握し、寄せられた質問への対応をマニュアルに反映させて準備を整えた。

5 適用後の状況

2017年4月から正式な適用を開始し、2017年8月末現在で5か月が経過したところである。

スタッフへのトレーニング期間はあまり長くは取れなかったが、もともとRDA形の書誌をAACR2形に直す作業を行ってきたことから、相違点の理解は進んでおり、目立ったトラブルもなくスムーズに変更することができた。トレーニング時から適用直後

にかけて寄せられた質問では、タグが新設されて記述方法が変わった出版事項、著作権年に関するものが特に多かった。質問は4月に入ってすぐに落ち着き、その後は、非図書や学位論文の複製など、特殊なケースに当たった場合に限られている。

2017年度始めから6月頃にかけては、新規受入図書の処理に数日のタイムラグが発生していたが、要因は規則変更だけでなく、年度末の予想外の発注量の増加、委託スタッフの減員など複合的なものと考えている。委託スタッフの洋書1冊の処理にかかる時間も、変更から2か月は12分、14分という実績だったが、7月には10.6分と2016年度並みに戻っており、慣れとともに負荷は解消している。

今後については、適用範囲を洋書だけとしているのを中国語、韓国語、ロシア語などのラテン文字以外の資料に対応していくかどうか近々の課題である。また、和書には引き続きAACR2を適用しているが、2018年に刊行が予定されている新しい日本目録規則への対応を検討していく必要がある。

最後に、体現形の書誌記述への適用は実現できたが、実体間の関連というRDAの最大の特徴はまだ活かしきれていない。エレメントが増え、書誌レコードがリッチにはなっているが、これまでの運用方法でできる範囲で当てはめただけとも言える。しかし、一大学で著作のデータや表現形のデータを体現形と合わせて整備していくのは現実的でなく、本学だけの問題ではない。

引き続き、外部機関の対応例や自動処理によるFRBR化の精度なども注視しつつ、今後の在り方を考えていきたい。

注・参考文献

- 1) The Library of Congress. MARC21 Standards.
<http://www.loc.gov/marc/>, (参照 2017-08-30).
- 2) 日本図書館協会目録委員会, 国立国会図書館収集書誌部. 序説(案). 日本目録規則(NCR)2018年版(仮称)全体条文案. 2017.2 公開. 10p.
http://ndl.go.jp/jp/data/ncr-_1702.pdf
- 3) 本学では、有償・無償を問わず、外部機関やユーティリティの提供MARCを図書館システムに取り込んでコピーカタログングのために利用する仕組みを「書誌調達」と定義している。
- 4) Barbara B. Tillett, Library of Congress. RDA 資源の記述とアクセス: 理念と実践. 東京, 樹村房, 2014, 383p.